

2019年度 海外研修・研究等 助成事業 研修報告

LGBT教育を先進諸国から学ぶ – 先進国スウェーデンの視点から –

沼津市立大岡小学校 養護教諭 中村 富美子

はじめに

日本の人口の7.6%、LGBTは存在する^{※1}と言われ、さらに約半数が小学校卒業までに自覚している^{※2}。しかし、周囲の無理解により、いじめや自殺に追い込まれるケースも出てきている。小学校でLGBTへの対応は喫緊の課題であり、LGBT教育先進国であるスウェーデンでの研修を実施した。

研修内容

- ・School Nurses International Conference2019 Stockholm Sweden参加
- ・学校、福祉施設視察及び地区踏査

●「LGBT Q+」＝「人権」

『Q:Questioning,Queer』とは、Questioningは、自身の性自認や、性的指向が定まっていなセクシャリティ、Queerは、性が男女や異性愛しかなくを前提にしていることに異を唱え、「マイノリティー」としてではなく、「人間として」存在することを自認する人々である。『+:プラス』とは、性は多様で、枠を限定するものではなく、常に新しい多様性にオープンでいようという考えを表している。ストックホルム市内の至るところでレインボーフラッグがはためいており、単なる性教育で「LGBT Q+」を解決しようとするのではなく、国全体が「人権」という枠組みで取り組んでいることがわかった。

●「全ての子供が平等に」

1980年以降のスウェーデンの学校は、「みんなの学校」というスローガンで、インクルーシブ教育に取り組んできた。

・性的マイノリティーの生徒への配慮

小学校の低学年から身体や性をテーマにした授業があり、

性教育が実施されているが、教科として位置づけられているわけではない。カリキュラムの中に教科の枠を超えて位置づく「学習テーマ」である。身体、性、健康や人間関係について横断的に学んでいる。学校の生徒健康ケアチーム(図表1)と連携して、個別及び集団への支援が行われている。

・「LGBT Q+」認定校学校

色々な家族の形があることや、例えば、両親がゲイカップルの子供、子供自身がLGBTQ+、LGBTQ+ではないが、そのような環境(多様性)を希望する保護者の子供などが在籍している。

まとめ

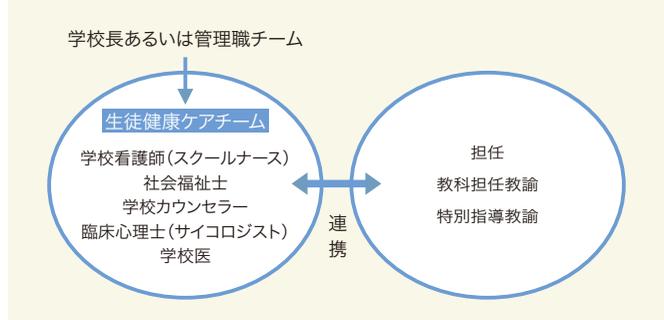
スウェーデンの生徒健康ケアチームは、障害名の有無で組織されるのではない。多様性の中で、不健康な状況が顕在化、もしくは潜在している状態でも組織され、予防的にも機能している。対象児童に気づいた場合、学校長あるいは管理職からの指示のもと、学校看護師、社会福祉士、学校カウンセラー、臨床心理士、学校医がチームを組み、担任らと協働していくシステムは非常に有効である。養護教諭は、学校という場で毎日子供と生活している。直接的なケアの担い手でもあり、集団的な働きかけ(健康教育や環境整備)も行える立場におり、「LGBT Q+」対応のキーパーソンだと言えよう。今後は、子供の人権を守るチームの一員として、子供が安心して学校生活を送れる環境を作っていくことを目指していきたい。

引用文献

※1 電通ダイバーシティラボ2015

※2 いのちリスペクトホワイトキャンペーンによるLGBTの学校生活に関する実態調査2013

図表1 生徒健康ケアチーム



ストックホルム市内街中のレインボーフラッグ